

もの忘れが始まった家族「、「ひょっとして認知症では？」と疑うことは大事だが、それ以上のことをしてはいけない。

80歳のA子さん。軽度の認知症の患者なんだ。ポツンと言。「お父さんって、私のことをバカにして」「と、なんとも悲しそうな表情をするではないか。

で、よく話を聞くと、82歳の夫が、この頃やたら、「今日は何日か？」「何曜日か？」「朝ごはんは何を食べたか？」「昨日何をしたか？」など、つまらない質問をするようになった。で、ちょっと間違えたりしちゃうものなら、「お前、ボケたなー」と嘆くという。そして、「今日は月曜日」とか、「昨日は、スーパーへ行った」などと繰り返し言われる。まるで、幼稚園児のような扱いだと訴えるのだ。それは、いかん。

ま、A子さんの夫の気持ちが分からないわけでもない。昔は賢明だった妻も、いや、もの忘れも少しずつ進むというから、今日は大丈夫かと気になる。で、自分なりにテストをして、A子さんの記憶力はどうか確かめているのだ。できないと、ついで

め息がでてしまう。そして、A子さんに、何度も忘れたことを思い出させ、少しでも記憶力を高めようとしているのだろう。

が、その涙ぐましい努力も、決して実を結ぶことはない。逆に、患者さんのプライドを傷つけ、心にしこりを残すことになる。認知症の周辺症状（不安、抑うつ、妄想、徘徊などの行動や心理状態で起る症状）が加わったり、悪くさせたりするだけである。

認知症の初期には、患者さんは、もの忘れや生活障害も自覚している。そして、それを必死に隠しているようにみえる。だから、家族は、認知症の疑いを持っても、「知らないふり」が求められるのだ。で、症状の経過はメモをして、後で医者に話せばよい。

（石黒修三 しいしほろクリニク・脳神

経外科医：10/17 北國新聞掲載）